Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

展示ホールで佇(たたず)んでます

平成25年度企画展示開催中

東京都埋蔵文化財センター報 94

速報！ 東京都埋蔵文化財センターの 楽しい体験イベント 2013春・夏

東京都埋蔵文化財センターでは、今年度も皆さんが楽しく参加できる体験イベントをご用意いたしました。上半期の注目行事について、ダイジェストでご紹介します。

東京都埋蔵文化財センターでは、昔を「**知る**」、「**作る**」、「**感じる**」をコンセプトに、年間を通じていろいろな体験行事や文化財講演会などを行ってきました。平成25年度もすでに半ばを過ぎましたが、これまでに行われたイベントのいくつかを紹介したいと思います。

５月３・４日の連休には、すっかり恒例になった「**縄文ワクワク体験まつり**」を実施しました。お蔭様で、晴天に恵まれて多くの皆さんにご来場いただきました。今年は、好評だった「**弓矢体験**」のゲージを一つ増やして、多くの方に体験していただけるようにいたしました。

標的は、「張子の虎」ならぬ、厚いダンボール紙で作ったＮ係長苦心の作「イノシシ」と「ウサギ」です。さすがに、厚くて射抜けないかと思いきや、狙いを定めて放った矢の勢いは意外に強く、多くの矢が刺さってしまい、急遽、的を補修しながらの実施となりましたが、２日間何とか持ちこたえました。新任職員のＴ君が竹と麻糸で作った、手製の弓の性能は証明されましたが、果たして実際は・・・・。

次に人気は、「**勾玉作り**」です。今年も、多くの方に作ってもらいました。親子で参加のお父さんもいつしか「自分の世界」に没頭し、真剣な眼差しでひたすら滑石（軟らかい石）を削り、磨いていましたね。もちろん、お子さんの勾玉も職員とボランティアの学生がお手伝いして、完成しました。ただの四角い石を加工し、成形していく過程で、勾玉には作者の「魂」が投影されるのでしょうね。皆さん、作った勾玉を大事そうに首にかけていました。

当センターといえば、「**縄文土器作り**」には定評があります。手前味噌を承知で申しますと、うちは縄文人も使ったブランドものの粘土を使用しています。それは、町田市小山ヶ丘の多摩ニュータウン№248遺跡、縄文時代中期の粘土採掘跡が発見された遺跡より採取された粘土をベースに、長年の経験で培った微妙な砂の混ぜ具合による、「作り易く」、「割れにくい」天然素材なのです。この粘土を使って、今年もすでに、一般・親子を対象とした「縄文土器作り」を３度行いました。

どんな土器に焼けるのでしょうか？　ドキッドキッ！！

写真は、６月の野焼きの状況ですが、参加者の皆さん、５月に丸々二日間かけて製作した縄文土器の仕上がりに、大変ご満悦な様子。とはいえ、夏の野焼きは過酷です。まずは、焚火をしながら、土器を満遍なく乾かすために、少しずつ置き方を変えて炙ります。その後、焚火の中央に土器を集めて、いよいよ、本焼きに移りますが、この時、火の温度は優に800℃を超えます。周囲での作業も困難になるくらいの高温です。でも、そうした苦労も見事に赤褐色に焼きあがった縄文土器を見れば、いっぺんに報われます。

これは、なんとも不思議な感覚ですよね・・・・。皆さんも、この感動を一度味わってみてはいかがでしょうか？

年度の後半は、「**トンボ玉作り**」や「**縄文食体験**」、装身・装飾をテーマとした「**文化財講演会**」などが目白押しです。**東京都埋蔵文化財センター**は、まさに、身近で楽しめる**知のワンダーランド**なのです！！

（松崎）

弓矢体験　イノシシにねらいを定め、弓をひきしぼる

遺跡だより 97

新宿区市谷薬王寺町遺跡、市谷柳町遺跡

所 在 地：新宿区市谷薬王寺町、市谷柳町
調査期間：2008 年 7 月 11 日～
調査面積：6,654 ㎡

調査地は、環状第 3 号線の整備事業に係る発掘調査であるため南北に細長く、長さは約 400 mにも及んでいます。江戸時代と縄文時代が主体の遺跡で、今回は江戸時代の遺構と遺物について紹介します。

現在も断続的に発掘調査が行われており、2,500 基を超す遺構が検出されています。幕末の絵地図等から、旗本屋敷、薬王寺境内地、市谷南寺町拝領町屋、御先手同心大縄地、御旗同心大縄地、市谷柳町町屋であったことが分かります。調査地は、武家地、寺社地、町屋を貫いています。

南端の旗本屋敷からは、建物跡、井戸、大溝とそれに伴う石組遺構（写真 1）、大規模な焼土層、植栽痕やごみ穴などが見つかっています。大溝は、およそ N20° E の南北方向に掘られ、深さは 2.5 m以上、確認できた長さは約 70 m、幅は約 3.6 mを測ります。周辺の調査が進めば、その規模が明らかになるものと思われます。石組遺構は、大溝の片側だけに認められ、長さは確認されただけでも 25 mに及びます。

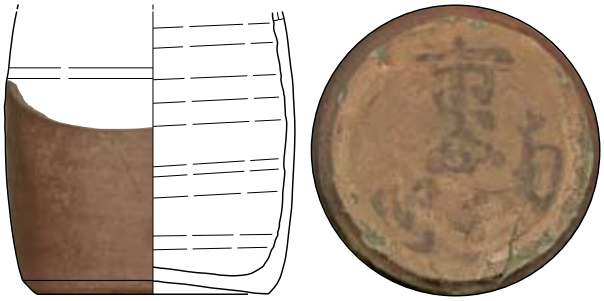
薬王寺境内地からは、建物跡、井戸、埋甕等が見つかりました。建物は、掘立柱建物跡から礎石建物へと変遷したようです。

市谷南寺町拝領町屋からは、地下室がまとまって見つかっています。また底に「市谷南寺町」と墨書された徳利の底部破片も出土しています（写真 2）。写真 3 は江戸時代の道跡で、絵地図の位置と一致しました。構築層の高さは 1 mを超え、ローム土と黒色土を交互にたたき締めていました。江戸時代の道の造り方を知る上でも、貴重な資料です。町屋からも土蔵、井戸、下水溝、埋桶、胞衣皿等が見つかりました。写真 4 は町屋で検出された井戸跡です。周辺には土蔵群が展開しており、方向が同じであることからも同時期のものと考えられます。

遺跡から出土した遺物は、江戸時代の始めから幕末に及んでいます。多量の陶磁器や瓦、人形や泥面子などの土製品、臼、砥石、硯、火打ち石などの石製品、桶や木札、箸などの木製品、釘や包丁、銭貨などの金属製品等、枚挙に遑が無い程です。瓦だけでも約 4 万点、重さ約 4 t が出土しました。

発掘調査も整理調査も、いよいよ終盤に差し掛かっています。（金持）

1. 江戸時代の石組遺構



2. 底部に「市谷南寺町」の墨書がある徳利

3. 江戸時代の道跡

4. 江戸時代の井戸

遺跡だより 98

港区品川台場（第五）遺跡

所 在 地：港区港南五丁目
調査期間：【2011 年度】2012 年 2 ～ 3 月
【2012 年度】2012 年 10 月～ 2013 年 3 月
調査面積：【2011 年度】520 ㎡【2012 年度】約 3,000 ㎡

レインボーブリッジの眼下には、「お台場」の由来となった西洋式の海上砲台「品川御台場」のうち、国史跡の指定を受けた第三と第六の２基の台場が今なお残されています。幕末の「黒船来航」を機に、江戸湾防御の拠点として品川沖に急遽築造された品川御台場は、当初 11 基（のち 12 基）の配置計画でしたが、資金不足などから最終的に海上５基・海岸１基が完成をみます。幸いにも実戦で使われることなく明治維新を迎えたのち、国史跡の２基を除き、東京湾の開発に伴って次第に姿を消してしまいました。品川ふ頭内に埋没した第五台場も、第一台場とともに消滅したかのようにみられていました。

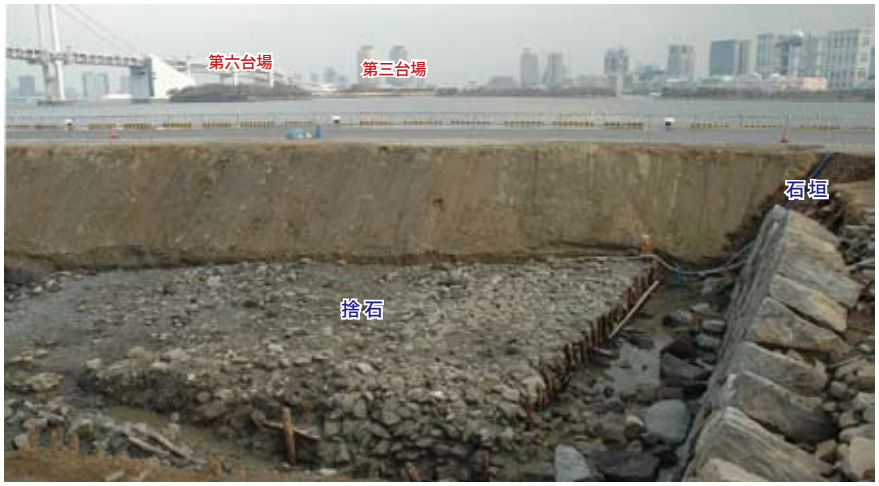
ところが、1991 年に第一台場の石垣が発見され、品川ふ頭の足下に台場が良好な状態で眠っている可能性が高まりました。そして、2012 年、品川ふ頭再編整備事業に関連して東京都港湾局の全面的な協力のもとで実施された２度の発掘調査で、第五台場が往時の姿を現したのです。

2011 年度調査地点は、台場内の北側入口付近にあたり、絵図との照合により、「屯所（番士休息所）」と推定される建物の堅牢な木組み基礎、入口方面からの視界をさえぎる一文字堤、土塁の内法、間知石組の排水溝が検出され、台場内部の施設にかかわる下部構造の様子がはじめて明らかになりました。

屯所（番士休息所）跡と一文字堤【2011 年度調査】

翌 2012 年度の台場東側外縁部の調査では、石垣の隅角部を含む外周三辺の石垣をとらえ、第五台場全体の平面位置を確定することができました。石垣は最大４m弱の高さが削平をのがれて保存され、裏込から土塁外法にかけての内部構造、そして井桁状に組まれた胴木に支えられた海面下の基礎構造を確認しました。石垣前面の旧海面下には、杭列を伴う土丹（泥岩）塊などの石敷が沖合 20 m以上にまで広がり、捨石（石材投棄）による海中埋立の実態が明らかになりました。

設計・指揮にあたった江川太郎左衛門英龍は、品川沖の「埋立之方ハ手軽に候」と自ら評したように、わずか１年３ヶ月足らずで海上に６基の人工島を完成させました。幕府の威信をかけた一大国家プロジェクトは、在来の土木技術と西洋の築城技法との融合によって成し遂げられたといえるでしょう。品川御台場のほか日本各地の沿岸に築造された千基余りの台場・砲台は、開国へと至る激動の幕末を直接物語る遺構であるとともに、近代日本を切り開く技術の礎につながったことは言うまでもありません。在来の築城・土木技術が幕末まで、そして近代から現代までいかに受け継がれてきたのか、台場の調査を通じて解き明かして行きたいと思います。（大八木）



北面の石垣と旧海面下に敷かれた捨石（第三・第六台場を望む）【2012 年度調査】

隅角部の石垣【2012 年度調査】

ぶらり旧石器さんぽ　Vol.5

浅い谷のまわりの遺跡　埼玉県三芳町中東遺跡ほか

「ぶらきゅう」シリーズでは、東京都内の旧石器時代の遺跡を訪ね、旧石器時代人がどのような場所に暮らしたのか、それぞれの土地の起伏など地形と景観の復元を通じて、紹介していきます。

武蔵野台地の地形と浅い谷　武蔵野台地は東京都だけではなく、北側は埼玉県にまたがっています。埼玉県側の武蔵野台地は、東京都側とは地形と遺跡の特徴が異なっています。そこで今回は、東京都の外側のことですが、埼玉県側の事例を紹介します。

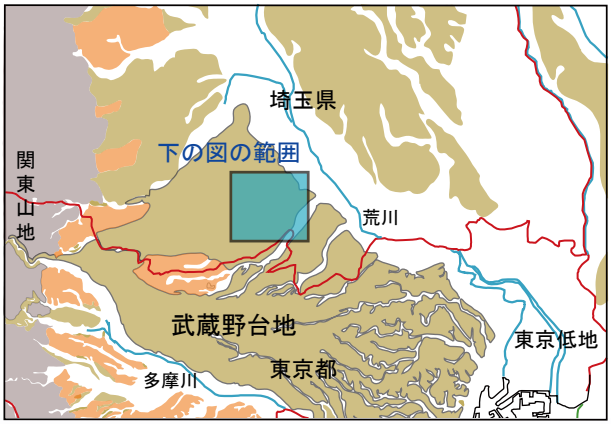
東京都側では、旧石器時代の遺跡は小河川などに面した崖の上にあります。旧石器人は、崖の下に湧く湧水やその周りに集まる動植物を利用して生活していました。しかし埼玉県側では台地の縁に短い川があるだけで、台地の奥はほぼ平らです。ただしその短い川の上流には、水の流れていない浅い谷が続いており、その浅い谷のまわりに旧石器時代の遺跡があるのです。

浅い谷と季節的な移動生活　旧石器時代は現在よりも寒冷で乾燥した時代です。雨量は少なく、川の水量も少なかったと考えられます。浅い谷は旧石器時代でも、ふだん水は流れておらず、雨が降ったときだけ流れる川だったと考えられます。

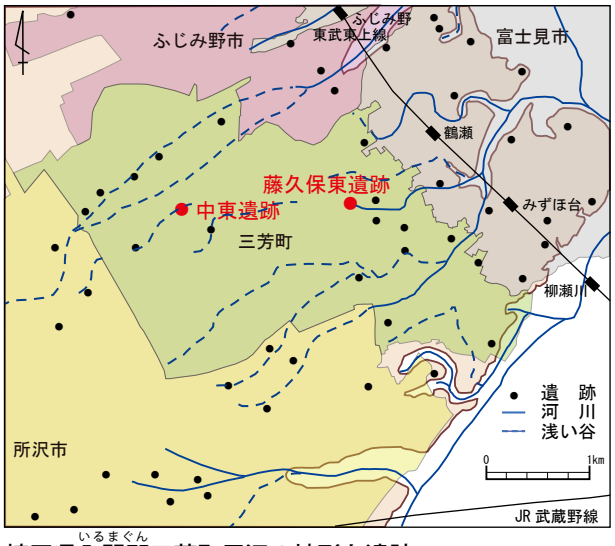
埼玉県の旧石器時代の遺跡は、東京都側と比べ決して少なくはありません。ただ、東京都側と比べて遺跡の規模も小さいので、雨の多い季節をねらって移動してきたものと考えることができます。雨水をあてにして暮らしていたのでしょう。

地形と旧石器人の生活の関係を示す一例でした。

三芳町藤久保東遺跡
江川の最上流の水源地にある遺跡。小さな谷奥の湧水をめぐって遺跡が展開している。現在では造成で地形が変わりわかりにくいが、中央がわずかに窪んで谷をなしているのが、道路の曲線の具合から理解できる。



武蔵野台地の地形
武蔵野台地北部の埼玉県側は、南部の東京都側に比べ小河川が少なく起伏の小さい地形をしている。（石器文化研究会 2000『石器文化研究』8 をもとに作成）



埼玉県入間郡三芳町周辺の地形と遺跡
小河川は短く、上流のほとんどは水の流れていない浅い谷でしかない。遺跡は、その浅い谷の近くにある。（石器文化研究会 2006『第 11 回石器文化研究交流会発表要旨』をもとに作成）

三芳町中東遺跡
藤久保東遺跡よりも上流にあり、遺跡の規模は大きくない。左写真と同様に真ん中辺りが約 1 m沈んでいるが、谷があることはほとんどわからない。ただし大雨が降ると水が溢れ出し、川だったことがわかる。　（伊藤）

クルミと石器の話

今年も東京都埋蔵文化財センターの遺跡庭園には、オニグルミがたわわに実っています。クルミについては、以前『たまのよこやま』85号で書きましたが、今回は、**オニグルミと石器の関係**についてのお話しです。

私が広報企画係で勤務している時、秋のイベント『縄文食体験』の下準備で、「縄文クッキー」に使うマテバシイ、スダジイなどのドングリや、オニグルミの殻を割って中身を取り出す作業をよく行ったものです。マテバシイ・スダジイの殻は比較的簡単に割れるのですが、オニグルミの殻は本当に硬いのです。金槌だと一撃で割れますが、殻と一緒に実も砕けてしまい、実を取り出すのに効率が良くありません。

そこで当センターの体験コーナーにある石皿と磨石を利用して、オニグルミの尖った先端を上に向け石皿の上に載せ、片手で握れる大きさの楕円形で平らな川原石で、その尖った部分を垂直に叩くと…殻は真っ二つに！しかも肝心の中身は壊れずに上手く取り出すことが出来ました。これはイイ！やはり縄文人は、オニグルミの中身を効率よく取り出すやり方を知っていたんだ！…と思いながら調子に乗ってたくさん割り続けました。

しかしこの作業、意外と疲れるのです。しばらく続けると叩いている手がぶれて、上手く割れなかったり、自分の手を叩いてしまったりするので、少し休憩…。

休憩がてら、叩いていた石を観察すると「？？？」オニグルミの尖った部分を叩いていたため、使っていた川原石の中央部付近に浅い凹みが出来ていました。

これはもしかしたら「凹石」では…？

縄文時代の遺跡からは、円形・楕円形で平らな面の中央部付近に浅い凹みが観察される、凹石という石器がよく出土します。この石器、漠然と木の実などの植物食料の殻を割ったと言われていますが、具体的にどのように使われた結果、石に凹みが残ったのかについては、はっきりしていません。

そこで、東村山市下宅部遺跡から大量に発見されたオニグルミの殻を観察してみました。すると、殻の先端が潰れていてさらに真っ二つに割れているものが多く認められました。もしかしたら、「凹石はオニグルミを叩くのに使った道具ではないか」という予測が頭の中に浮かびます。

しかし、凹石にも深い穴が開いているものや、中央部だけではなくあちこちに凹みが観察されるものもあることから、凹石とされている石器の全てがオニグルミを叩いたというわけではないようです。でも、中央部に観察される浅くぼんやりとした凹みについては、私がオニグルミを割るのに使った石に出来た凹みと良く似ています。

そこで、凹石についてどのような研究が行われているか調べてみると、オニグルミを割る実験により、生じる凹みのデータを集めた研究が、既に行われていました。やはり凹石は、オニグルミを割る道具として注目されていたのです。

ところで、インターネットでオニグルミの割り方を検索してみると、一粒なら電子レンジで30秒温めれば口が開き、そこにマイナスドライバーをさし込んでこじ開ければ、難なく開けることができ、実もきれいに取れるとのことです。現代の道具の進化には、縄文人も驚くに違いありません。しかし、縄文時代の住居の炉の中から、しばしばオニグルミの炭化した殻が発見されることがあることから、縄文人もオニグルミを軽く炙れば割れやすくなることに気付き、少し炙ってから割っていたのかもしれません。炭化して炉の中に残っていたオニグルミは、燃料として燃やされた殻なのか、あるいは軽く炙っている最中に炉の中に落ちてしまったものなのか……

電子レンジを利用するという現代の知恵から遡って、オニグルミを焚火で炙ってから凹石で割る、なんて方法も試してみる価値はありそうです。（鈴木）

多摩ニュータウン№.9遺跡出土の凹石

凹石の持ち方と凹みの様子

多摩ニュータウンNo. 235 遺跡は、東京都町田市相原町境峯にありました。境川中流域の多摩丘陵に入り込んだ谷が二本に分かれた、東谷の最奥部に位置します。平成 7 年に谷の南側部分 4,000㎡の調査を実施し、縄文時代の土坑 28 基、古代の土坑 12 基・焼土跡 10 基、近世以降の段切 1 基・溝 6 条が検出されました。今回紹介する平成 8 年度の調査地区は、標高 152 mから 171 mを測る谷の北側地区で、8,620㎡を発掘しました。

発掘調査は、平成 8 年 4 月から翌平成 9 年 3 月までの 1 年間行いました。検出された遺構は、縄文時代の竪穴住居跡 3 軒・土坑 65 基・焼土跡 12 基・集石 1 基・埋甕 1 基、古墳時代の竪穴住居跡 3 軒・畑跡・焼土跡 7 基・集石 1 基、平安時代の竪穴住居跡 1 軒・土坑 32 基・溝 1 条、中世以降の畑跡・粘土採掘坑 3 群・炭焼窯 1 基・井戸 1 基・道路跡 1 条・土坑 5 基です。

この調査で注目されたのは、古墳時代の遺構群です。谷頭の斜面地で検出された住居跡 3 軒は、古墳時代後期の 7 世紀後半に存在し、同時に火災で焼失しています。この住居跡群から谷を 40 m ほど下ると畑跡があります。この畑跡は、出土遺物から住居跡と同時期であることが判明しています。全体に炭化材や焼土が分布していることから、焼畑農法が行われていたと考えられています。

では、この畑ではどのような作物を栽培していたのでしょうか。その手掛りはサク (鍬で掘り込んだ溝) の中から検出されました。土壌の植物珪酸体分析で、わずかですがオオムギ属の珪酸体が検出されただけでなく、炭化したオオムギの種子 1 点が発見されたのです。この畑では大麦栽培が行われていたのです。また、2 号住居跡から出土した土師器坏の内底面には、イネの籾の圧痕が付着していました。谷を南に 300 mほど下った境川河川敷の水田で、稲作が行われていたと考えられます。

この畑を覆っている土壌は、大きな礫やローム層の塊が混じった土砂です。サクの中にも土砂が流入していることから、この畑は谷の両側の山が崩れ、土砂に押しつぶされ埋没してしまったと考えられます。住居跡では土師器などの生活道具などがそのまま重なって出土しており、3 軒とも火災をおこし、取るものもとらず避難したように見えます。

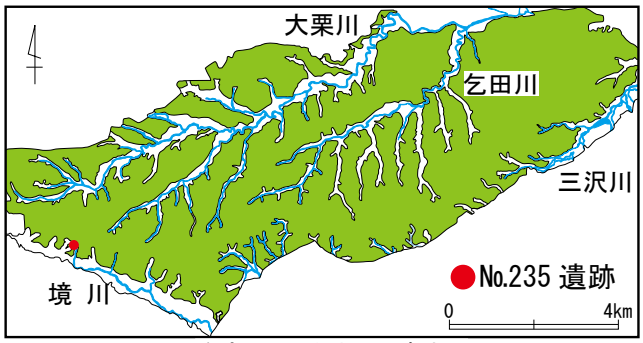
日本書紀には、天武 13 年 (684) に南海・東海地震があり、寺や民家が倒壊し、大津波が襲ったと記述されています。

畑が土砂崩れで埋まり、3 軒の家が焼失したのは、この時の地震によるものではないかとも考えられています。 (川田)

1/964

多摩ﾆｭｰﾀｳﾝ地域では、964 ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

 # 15 多摩ﾆｭｰﾀｳﾝNo. 235 遺跡



多摩ニュータウンの遺跡

遺物出土状況 [2 号住居跡]

古墳時代の畑跡全景

古墳時代の竪穴住居跡 [2 号住居跡]

平成25年度　年間展示解説シリーズ　その2

縄文人のおしゃれ

―装い・デザイン・色彩―

今回は展示テーマの一つ、「人はなぜ身を飾るのか」から、縄文時代の「耳飾り」について紹介します。

現代の私達は、形・材質・色合いが多様な「耳飾り」の中から、自分に似合うものを選んで身に着けています。では、縄文時代の耳飾りはどのようなものだったのでしょうか？

展示では、「玦状耳飾」「耳栓」「滑車形耳飾」の3種類を見ることができます。

「玦状耳飾」は、形が中国の「玦」という玉器に似ていることから、そう呼ばれています。円環の一部が切り離され、ちょうど「C」の字の離れている部分が下に向いたような形をしています。縄文時代早期の終わり頃に出現し、石を磨いて作ったものや粘土を焼いて作ったもの、動物の骨や角を使ったものがあります。大阪府藤井寺市の国府遺跡では、人の頭骨の両脇から出土しています。

「耳栓」は縄文時代中期に出現しました。特徴は、形状が円柱形か鼓形をしている点で、土製のものが多く、渦巻き文様や刺突文様などの装飾を施したものがあります。今回展示している千葉県千葉市の月之木貝塚から出土したものは、鼓形をした本体の全面を赤色に塗彩し、中心部の孔にアワビの貝殻の薄片をはめ込むという凝りようです。赤く彩られた耳飾りの中心で真珠色に煌めくアワビの貝殻。斬新な縄文人のデザイン感覚に脱帽です！

「滑車形耳飾」は、縄文時代中期後半頃に耳栓の大型化・装飾化に伴って登場します。調布市の下布田遺跡出土の耳飾り［国重要文化財］のように、複雑な透彫を施した精巧な作りのものも見られます（展示ではレプリカを展示しています）。

これらの耳飾りについて、来館された方々からたびたび受ける質問が、その装着方法についてです。

その装着方法は、耳たぶに孔を開けて通すもので、現代のピアスと同じです。玦状耳飾は切れ込みから一方の端を（写真右）、耳栓や滑車形耳飾はそのまま孔にはめ込みます（写真左）。

このように説明すると、多くの方は一様に顔をしかめます。「痛そー！」「こんな大きなものが通るほどの孔をあけるの？」。

もちろん、いきなり大きな孔を開けるわけではありません。まず始めに小さな孔を開け、それに合うサイズのモノをはめ込みます。しかし、滑車形耳飾の中には直径が10cmを超えるものもあり、そんなに耳たぶが伸びるのだろうかと不思議に思ってしまいます。でも、巨大な耳飾りを装着するアフリカのマサイ族などの民族事例が示すように、長い時間をかけ少しずつ大きなものを順にはめていくことで、耳たぶは無理なく拡がるのです。

そうした耳飾りの装着法は、土偶にも看て取れます。縄文時代後・晩期のミミズク土偶は、耳に大きな耳飾りをつけています。今回2体のミミズク土偶を交互（3ヶ月おき）に展示しています。両方をご覧になれる絶好の機会ですので、展示替え期日をご確認いただき、再度のご来館をお待ちしております。

「自分を美しく飾る」だけでなく、「特別な時に着けるおしゃれ」「とても大事なお守り」などなど、人が身を飾る理由は実に様々です。

皆さんも縄文時代の耳飾りを通して、「人はなぜ身を飾るのか」を改めて考えてみませんか？

展示期間は来年3月9日までです。　（武内）

たまのよこやま 94　2013年9月30日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　http://www.tef.or.jp/maibun/